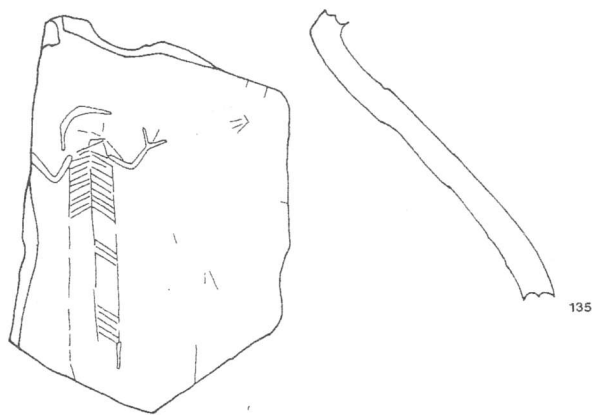


備陽史探訪の会4月徒歩例会

鮎山の丘に古作の弥生土器を 見ると

花のもとにて春



道上渡瀬遺跡出土の弥生土器片

主催備陽史探訪の会

平成16年4月4日(日)実施

スケジュール

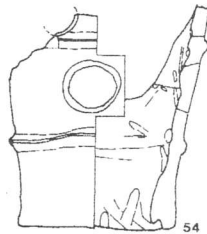
- ◎ 午前8時40分 駅前釣人像前集合
- ◎ 同 8時58分 井笠バス「中条三谷行」乗車
- ◎ 同 9時30分 宮下バス停下車
- ◎ 同 9時45分 大坊古墳
- ◎ 同10時15分 的場遺跡
- ◎ 同11時00分 猫山古墳
- ◎ 同11時30分 護国寺
- ◎ 同11時50分 中谷廃寺跡
- ◎ 正午頃 亀山遺跡

(昼食を兼ねて花見をします、不参加の方はここで解散)

※ JR 福塩線道上発福山行、12時30分があります

※ 花見は3時には終る予定です。

※ JR 福塩線道上発福山行、14時33分、15時30分があります



道上鍋屋古墳出土の埴輪

ゴミは自分で持ちかえりましょう

備中に入ってしまった。この辺りでバスを降り、史跡巡りの旅を始めよう。高屋町の「吉野バス停」で下車し、旧山陽道に沿って備後へ引き返すとき、まず注意していただきたいのは、現県境を越えるところにある細い溝だ。南北を走るこの細い溝こそ往時の国境だ。そして、溝が南に突き当たったところに聳える台形の小山に注意して欲しい。備後・備中の国境に築かれた戦国の城塞竜山城の跡である。平和な時代、「境」はそれ程の意味を持たないが、戦国の時代は違う。「境」は人々、中でも武士が命を懸けて守る場所であり、各地の「境」には大小さまざまな城塞が築かれた。この城もその一つである。

八丈岩 さらに進むと、右手に「八丈岩登山口」の標識が目につく。八丈岩は街道の北側に聳える御嶺山のピークにある巨大な岩で八畳敷きの広さがあるところからその名がある。一帯は花崗岩土壌の風化した巨岩地帯で、八丈岩のほか千人隠れ岩など名前の着いた巨岩が累々と連なり、観光名所となっている。登山道も整備され、花の季節や紅葉のシーズンにはここで弁当をひろげるのも一興だろう。

さて、このコースのメインは国分寺から道上にかけての一带である。最初に紹介した備後備中の国境からここまで歩くと息が切れるから、メインだけじっくり見ようという方は、井原鉄道の『御嶺剛』か井笠バス『国分寺前』バス停で下車す

ることをお薦めする。

備後国分寺 神辺町の国分寺一带から同町の道上にかけては古代遺跡の宝庫である。まず、訪ねたいのは備後国分寺だ。現在も真言宗の古刹として法灯を伝える国分寺は、もちろん、奈良時代に聖武天皇の勅願によって国々に建てられた国分寺の一つである。だが、現在の寺は江戸時代の建物で、かつての伽藍は現国分寺の前面に眠っている。昭和四七年に実施された発掘調査によると、創建時の伽藍は現在の山門の南約一八〇m四方に及ぶ広大なもので、正面向かって右に塔、左手に金堂を配す『法起寺式』伽藍配置であったことが明らかになっている。福山周辺の古代寺院には蔵王町の宮の前廃寺跡を初めこの伽藍配置のものが多い。何故だろうか…。解き明かしたい謎の一つである。

堂々川の砂留 ここからは国分寺門前を東西に走る旧山陽道（現県道下御嶺新市線）を歩くと便利だ。国分寺の参道から右折して旧山陽道に入るとまず最初に堂々川の橋を渡る。ここで橋を渡らずに右に進むと有名な堂々川の『砂留』に至る。砂留は江戸時代から明治にかけての砂防ダムのもので、ここのは見事な石組・石垣によって構成された全国的にも指折れの規模と構造を持っており、一見の価値ある遺跡である。また、途中『寒水寺道』の道標に沿って左に入ると、平安時代の創建と伝える真言宗寒水寺を訪

ねることができる。



迫山1号古墳

堂々川の橋上で北を望むと左右に丘陵が広がるが、いずれも備後南部屈指の横穴式後期群集墳の所在地として有名である。右手の山には国分寺裏山古墳群、左手の丘陵上にあるのが迫山古墳群だ。詳しくは古墳編に譲る。

小山池廃寺跡 ここからしばらく歩くと道は大きなため池の土手に出る。このため池は小山池といって現在鯉の養殖池として使用されているが、この池の北側に注目される遺跡が残っている。小山池廃寺跡だ。昔から池の水が干上がる季節に池の底から古代の布目瓦が出土することが知られていた。出土地点は丁度備後国分寺の西五百ほどに位置し、国分寺と同じに創建されたはずの『国分尼寺』の跡ではないか、こう考えられていたのだ。だが、昭和四六年から三次に渡って行われた発掘調査の結果は意外なものだった。出土瓦の形式から創建は国分寺より古いことが半明したのである。そうするとこの寺は国分尼寺として創建されたことは

ありえない。備後国分尼寺の解明は今後の課題である。

方八丁と大宮遺跡 堂々川から小山池まで距離を測るとおおよそ八百ほどである。そして、地図を広げるとその南におおよそ八百ほど四方の地割が復元できることが分かる。これがかつて備後国府の遺跡ではないかと騒がれた湯野の『方八丁』遺跡である。備後国府の所在地としては現在の府中市がその遺名を伝えた場所であることは諸氏の意見は一致している。だが、問題点があった。それは国分寺の位置である。聖武天皇の国分寺建立の詔によれば、それは国府の近在の風光明媚な場所に創建されることになっていた。だが、備後の国分寺は府中ではなく、遠く離れた神辺にある。なぜか…。そこで考えられたのが備後国府は当初神辺の湯野に置かれ、その後何らかの理由で現在の府中市域に移されたとする説である。その有力な傍証が全国的に見て国府の『国庁』の範囲を示すと言われる、湯野の『方八丁』の地名と地割であった。

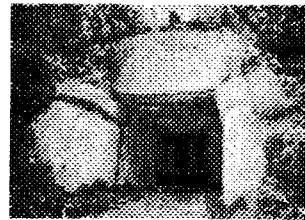
しかし、現在この考え方は過去の説になりつつある。最近幾度となく実施された発掘調査によると国府の痕跡はほとんどなく現地表の地割も近世のものである可能性が高まったためである。だが、この発掘は意外な成果を挙げた。弥生時代の環壕集落『大宮遺跡』の発見である。遺跡の発掘は区画整理の事前調査によるもので、現在地表には何も残っていないが

その南端には遺跡の名を冠した大宮公園があり、遺跡をしのぶようになっている。近くには菅茶山記念館もあり、井原線舞臺駅で神辺に向かえば手ごろな散策コースとなる。

安那中条 道は小山池を過ぎると要害山山塊の北をかすめて中条地区に入る。中条は古代律令制の転換期を示す地名である。律令制度の下では地方の行政は国・郡・里（郷）の三段階の行政区分で行われていた。だが、平安時代の後期になると、律令制の変質によってこの制度は改変を余儀なくされる。地方の政治は実質的には地方豪族の請負となり、行政区分もそれに応じて、国・郡・郷・条の二段階となる。条は郡を東西・南北で区分して支配の単位としたもので、神辺の中条も旧安那郡を東条・中条・西条に三分した名残である。ちなみに、現在東条の地名は残っていないが中世史料から現在の神辺町御嶺が「安那東条」であったことが知られ、そうすると中条の西に位置する福山の加茂の谷が「安那西条」であったことになる。

中条の史跡 神辺の中条地区も史跡に恵まれた地域である。古墳では終末期の整備な横穴式石室を持つ『大坊古墳』やその南の丘陵突端に位置する直径三〇メートルの大円墳の『猫山』、中世の山城では大坊古墳のすぐ裏山にあたる遍照寺山城跡、中条谷の奥、大字三谷との境に聳える木之上城跡などがある。中でも木之上城跡

は、平安時代初期の古瓦を出土する山岳寺院との複合遺跡で、地元の木之上遺跡保存会の奉仕によって登山道やトイレなどが整備され、家族連れの手ごろなハイキングコースとなっている。



大坊古墳

亀山遺跡 旧山陽道は、要害山山塊の北端をかすめると、一直線に西南に向かい中条の谷口を横切る。一歩ほど歩くと、左手に一見すると前方後円墳のような低い丘が見えてくる。弥生時代の環壕遺跡として有名な亀山遺跡だ。西に回って丘に上ると中腹に立派な社殿が立っている。吉備津彦を祭る岡山神社である。吉備津彦は備後の一宮の祭神として有名だが、元々は備中の吉備津神社の主神として祭られていたもので、吉備国が備後・備中・備前の三国に分割されたとき、それぞれの国に分けられた。亀山の岡山神社は、伝説によると、備中から備後に遷座された吉備津彦命の神霊が一時滞在されたところと言う。

亀山遺跡は、戦前からよく知られた弥生の遺跡である。当初は石器が多数出土することから『石器製造地』として県の史跡に指定された。ところが、この丘を公園に整備するため発掘すると意外なこ

とが分かって来た。山頂広場を中心に三重の環壕がめぐらされていたことが半明したのだ。住居址はまだ見付かっていない。あるいは、弥生中期後半に北九州から近畿地方に見られる「弥生の城塞」高地性集落の跡なのかも知れない。なお、この丘は古墳時代に入ると墓地に転用されたようで、山頂広場の南北には亀山第一・二号古墳が存在する。

中谷廃寺跡 亀山遺跡から北に広がる道上の丘陵地帯も古代遺跡の宝庫である。亀山から旧山陽道（現県道）を挟んで北には町立の道上小学校があり、造成に先だって実施された発掘調査で、法隆寺式の伽藍配置を持つ古代寺院の跡が確認された。中谷廃寺跡である。小学校の裏山も弥生から古墳時代にかけての遺跡密集地で、私がかつて踏査した時には、雨水で刻まれた溝には弥生の土器片がごろごろと転がっていた。古墳も多数存在するようで、未確認ながら前方後円墳も見付かっている。なお、前方後円墳は丘陵南側の平野帯にも存在したようで、かつては前方後円形に田の畔が残り、円筒埴輪も出土したという（福山市史上巻）。

石成荘道上条 道上は中世の面影も色濃く残した地域である。この地は中世「石成荘上村道上条」として史料に現れ、中世備後最大の国人領主であった宮氏が勢力を持っていた。

宮氏の本拠は芦品郡新市町新市一帯であったが、石成荘内にも早くから所領を

持ち、中条方面にも勢力を拡大していった。その拠点の一つとなったのが道上の護国寺である。現在同寺は真言宗となっているが、元々は南北朝時代の武将宮兼信・氏信父子が、足利二代將軍義詮の菩提を弔うために創建した臨濟宗の寺院で、室町時代には五山派の寺院として全盛を極めた。宮兼信・氏信父子は備後宮氏の惣筋の家の一つ『宮上野介家』の基礎を固めた人物で、一族の精神的な支柱として護国寺を創建したと考えられ、同寺の存在は宮上野介家の本拠がこの付近一帯にあったことの例証となる。その場合、中条の谷を囲むように築かれた城塞のうち、ひときわ抜きん出た規模と構造を持つ、遍照寺山城跡が同家の本城にふさわしく、護国寺はその南側の谷筋に存在することから、居城と菩提寺の関係を想定することができる。

正戸山城跡 ここまで来たら是非訪ねたいのが亀山遺跡から一キロ西に位置する御幸町の正戸山城跡である。同城跡は比高わずかに四・五〇に過ぎないが、眼下に旧山陽道が通り、正に戦略的な要衝を占めた城塞である。

山頂に立つと神辺平野は一望の下で、曲輪の跡も三段ほど残っている。南北朝時代には備後守護岩松頼有の居城として現れる同城だが、戦国時代には宮氏の拠城の一つとなり、毛利勢の攻撃を受け落城した。乱世に思いを馳せながら帰路につくのも悪くない。ここからJR福塩線万

能倉駅まで徒歩十分である。

中条いわし

今から四百年ばかり昔の話という。

備後国安那郡中条村（現神辺町）出身の佐貫坊という山伏が、信州のとある山中を旅していた時のことだ。日暮れて山中の一軒屋で宿を乞うと、中から「どうぞ」という女の声が出た。入ってみると老婆が一人で住んでいた。見ると髪は黒々として、声は娘のように張りがある。佐貫坊は気味悪く思ったが、山中で他に宿りする場所はない。請じられるまま囲炉裏端にすわった。

老婆も最初は佐貫坊を何をするかわからない旅の修験者として警戒していたが、佐貫坊に備後訛りがあるのを知ると、とたんに打ち解けて話しかけてきた。

「あんたは、備後の人でやんしょう」

「いかに私、備後の出身で、安那郡中条村の生まれです」

佐貫坊が中条の出身であることを知ると、老婆は喜んで、聞き返した。

「中条、わしも中条の生まれじゃ。今でも鯛（いわし）がぎょうさん取れるかのう…」

「いわし…」と聞いて、佐貫坊は絶句してしまった。

「なにゆういようてんなあ、中条は海から四里も離れとる村ですてえ…」

佐貫坊の話すのを聞いて、老婆は悲しそうに身の上話をはじめた。

「そうきやあ、そうじゃろうのう。わしが村を捨てたんは、何百年も昔の話じゃけえのう」

佐貫坊は息を吞んで、この不気味な老婆の話しに耳を傾けた。父は漁師でいわしを取るのが上手だったこと、娘の頃に人魚を食べてしまったこと、人魚には不老不死の力があって死ねない身体になったこと、子や孫が死んで村に居ずらくなり国を出たこと…。



神辺の昔話で有名な「中条いわし」の伝説だ。実は、人魚を食べて不死身の身体になったという話は全国各地にたくさん残っている。そして、たいていは、この「中条いわし」の話のように、長い歳月の間に海が陸になったという落ちが付いている。

神辺平野は、大昔「穴の海」と呼ばれる海の底だったという伝承がある。地名にも網付山や汐首など、海を想像させるものも多い。蛇円山の山頂に立って南を眺めると、袋状の平野が広がり、南の山際に芦田の流れが白く光っている。昔の人はこの袋状に広がる平野を海に見たてた。「中条いわし」の伝説も、この穴の海の伝承から生まれたものだ。

伝説の穴の海

かつて神辺平野には深く海水が侵入し、「穴の海」と呼ばれる入海が広がって

たという。

今から一万年以上前の氷河時代、海水面は現在より二百メートル以上下にあった。瀬戸内海はもちろんなく、日本列島は大陸とつながり、日本海は列島弧に囲まれた内陸の湖であった。この時代大陸の一部であった日本列島には、大陸から様々な動植物がやってきた。マンモス象やナウマン象などの大型草食獣や虎や豹、現在も北海道の日高山脈に生息するなき兎など、当然のことながら人類もこうした獲物を追ってやってきた。岡山県の羽鷲山や瀬戸大橋の橋脚になった島々から旧石器と呼ばれる石器が見つかるが、これはこうした狩人たちが残した遺物である。

ところが、今から一万年前から急激な地球の温暖化がはじまった。気温の上昇によって大陸や極地の氷は急激に融けだし、海水面は見る見る上昇していった。朝鮮海峡や宗谷海峡には海水が浸入し、大陸に三日月状に張りついていた当時の日本はユーラシア大陸から切り離され、現在のような弧状の列島になった。それまで広々とした草原だった四国と中国地方の間の盆地にも東西から海水が浸入し、現在の瀬戸内海が形成された。海水面の上昇は今から六千年前の縄文時代前期ピークに達し、海水は今より遥かに内陸まで侵入していた。関東地方はこの時代三分の二は海の底で、海水の侵入を物語る縄文時代の貝塚は群馬県の前橋辺りまで

存在する。

一説に、この「縄文海進」と呼ばれた海水面の上昇は、現在の標高五メートルにまで達していたといい、国土地理院の二万五千分の地図の標高五メートルの等高線をたどると、確かにこの「穴の海」は実在した。しかし、それは前回挿図として紹介した戦前の郷土史家が考証した「穴の海」ほどではない。福山市の御幸町を中心として西は駅家町の江良、東は神辺町の川比の東くらいであろうか…。

しかし一方で、この「穴の海」は神辺平野に存在しなかったことを推定させる証拠もある。それはこの伝説の「穴の海」の周辺に縄文時代の貝塚遺跡が現在までに1ヶ所も発見されていないことだ。穴の海のような遠浅の入海の岸辺は縄文人の絶好の棲家であったはずだ。関東地方の内陸部の貝塚をはじめ、近くは岡山県の倉敷、児島周辺の貝塚遺跡の存在がそれを示している。遠浅の入海には芦田川のような河川が河口を開け、その海水と真水の入り混じる「汽水域」はシジミ、蛤をはじめ縄文人の好物「貝類」の絶好の生息地だったからだ。

なぜか、ここに真実の「穴の海」を探る糸口が秘められている。

実在した穴の海

穴の海は実在したに違いない。

明治初年、町村制が施行された時、現福山市は安那・深津・品治・芦田・沼隈

の五郡（現在安那・芦田・沼隈郡の一部は府中市と神辺町に所属）で構成されていた。いずれも奈良時代以来の由緒ある郡名である。

中でも、安那郡は穴の海の「穴」が郡名の由来となった郡として重要である。現在の行政区画で言えば、現深安郡神辺町を中心に、福山市加茂町、同山野町がかつての安那郡にあたる。

では、この旧安那郡内に伝説の穴の海を求めべきかと言えば、ことはそう簡単ではない。西暦六四五年、大化の改新が断行され、国・郡・里制が施行された当初は、南に接する深津郡は安那郡に含まれていた。すなわち、『続日本紀』養老五年（七二一）四月の条に、「備後国安那郡を分けて、深津郡を置く」とあり、旧福山市の芦田川左岸にあたる深津郡が、かつては安那郡の一部だったことが判明する。安那・深津の両郡は明治の町村制の際に合併して「深安郡」となっているから、伝説の穴の海は、この旧深安郡域に存在したことになる。この点は重要である、今まで穴の海を論ずる研究者は、養老五年以後の安那郡を以って穴の海の故地と考えてきたが、それは誤りなのである。

穴の海の候補地を旧福山湾岸まで広げると、その比定地は落ちつくべきところに落ちつく。それは引野と箕島を湾口とするかつての「福山湾」だ。この地は近世初頭まで穴の海の名残を残していた。

元和五年（一六一九）八月、備後十萬石の大名となった水野勝成は、この湾の中心に新城を築き、眼下に広がる海原を埋め立てて、城下町を建設し、新田を造成していった。試みご地図を広げて、水野氏によって造成された地域を塗りつぶしてみるとどうなるか、見事な「穴の海」が広がるではないか。

旧福山湾が穴の海であったことは、考古学的にも立証できる。前回述べたように、今まで穴の海だと言われてきた神辺平野には、入海の証拠貝塚遺跡は存在しない。

これに対し、この旧福山湾岸には、旧海岸線に沿って貝塚が点々と分布する。引野町の長浜貝塚（奈良・平安）、大門町の大門貝塚（縄文）、蔵王町の仁吾貝塚（古墳～平安）、木之庄町の木之庄貝塚（縄文）、水呑町の洗谷貝塚（縄文）…。これらの貝塚遺跡を結びどうなるか。立派な穴の海が復元できる。

伝説の穴の海は確かに存在した。しかし、それは今まで言われてきた神辺平野ではなく、芦田川の河口に広がる現在の福山市街地の地下に存在したのである。

亀山遺跡

神辺町道上の亀山の丘陵が遺跡としてはじめて注目されたのは、昭和二年（一九二七）のことであった。この年七月、東京帝室博物館の高橋直一氏は、『備後

史談』上に「備後考古資料」と題して寄稿し、この中で石鏃が道上村大字道上亀山から出土していることを報じた。

この丘から弥生式土器や石鏃が出土することは、古くから知られていた。

『西備名区』安那郡道上村亀山の条に、「古城跡なりと云へども主名を伝えず。近き比、古刀の類、又、陶物等を掘出せし事あり。是より古城跡という…」とあって、当時の人々は出土する土器や石器を古城跡に関連するものと考えていた。

学術的に注目されるようになったのは、昭和六年のことで、この年備後郷土史会の招きで来福した早大の西村真次博士は、亀山の土器に注目し、「たしかに弥生式系統のもので、土質はいくらか緻密であり、焼成も多少は異なっているが、手法その他弥生式に属するものと見て差支えない」と述べた(備後史談第七巻第二号)。

昭和三年に実施された日本考古学協会の発掘調査によって、亀山遺跡は、弥生時代の前期から中期にかけての中部瀬戸内海地方の標準的な遺跡として、広く知られるようになった。

昭和五六年からはじまった広島県教育委員会による調査によって、この遺跡には大規模な環濠が存在することが分った。その後の発掘によって環濠は亀山の山頂を中心に三重に渡って巡らされ、平成六年の調査では、外側に土塁まで設けられ

ていることが確認された。亀山環濠集落の発見だ。

発掘の成果によると、環濠は最初南側の山頂を囲む一重であったが、その後二重になり、最盛期には北側の山頂をも取り巻く三重となり、外側に土塁を巡らす嚴重なものとなった。九州の吉野ヶ里ほど大規模なものではないが、全盛期の亀山は嚴重に防備された城塞集落であった。

環濠集落の出現は、日本に歴史の開幕を告げる大きな出来事であった。環濠は「敵」から身を守る施設であったが、当時の日本に虎やライオンはいない。敵は、同じ人間であった。農耕が始まると、水や耕地を巡って争いがはじまった。集落は外敵の襲撃に備えて武装した。これが環濠集落である。環濠集落には、外敵を防ぎ農耕を指揮するリーダーが登場した。やがて、人々は支配される者と支配する者に分れる。クニのはじまりだ。

亀山に住んだ人々も、やがて人口の増加によって、各地に新天地を求めて移り住んだ。弥生時代の中期から後期にかけて、遺跡の数は飛躍的に増える。いよいよ備後の歴史が始まる。その原点が亀山の丘であった。

以上 田口義之執筆

愛宕遺跡出土資料

実測図番号38・39)

愛宕遺跡(西中条的場)は、的場遺跡のある丘陵頂上にある墳墓遺跡である。この丘陵尾根はほぼ東西にのび、東端で南北にのびるT字形を呈す。尾根の交差する所に社跡があり、ここから南にのびる尾根上に低い墳丘をもつ墳墓が4-5墓存在する。また、北にのびる尾根には箱式石棺が数基みられる。社跡から西にのびる尾根上にも数基の墳墓がある。いずれも長方形をし、約6×10m、3×9m、5×2mの規模のものに続き、南北約7m東西約17m高さ約2mの墳墓があり、下記の土器や赤色顔料が採集されている。墳丘のやや中央に大きな石2個が置かれ、その西に幅約1m、長さ約3mの長方形になるように自然石8個が囲むように置かれている。

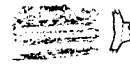
(38)は、特殊壺のタガ部分で胎土はチヨコレト色を呈し、外面には赤色顔料が塗布されている。タガには2本の凹線かめくる。(39)は鉢の口縁部で、直立する口縁部には7条の沈線が入り体部はへう磨きされている。外面は赤色顔料が塗布されている。

神辺町教育委員会刊

歴史民俗資料館史料目録Xより
土器や埴輪の図面はこの目録

(VI・VIIも併せて)より引用

しました



(38) 特殊壺破片

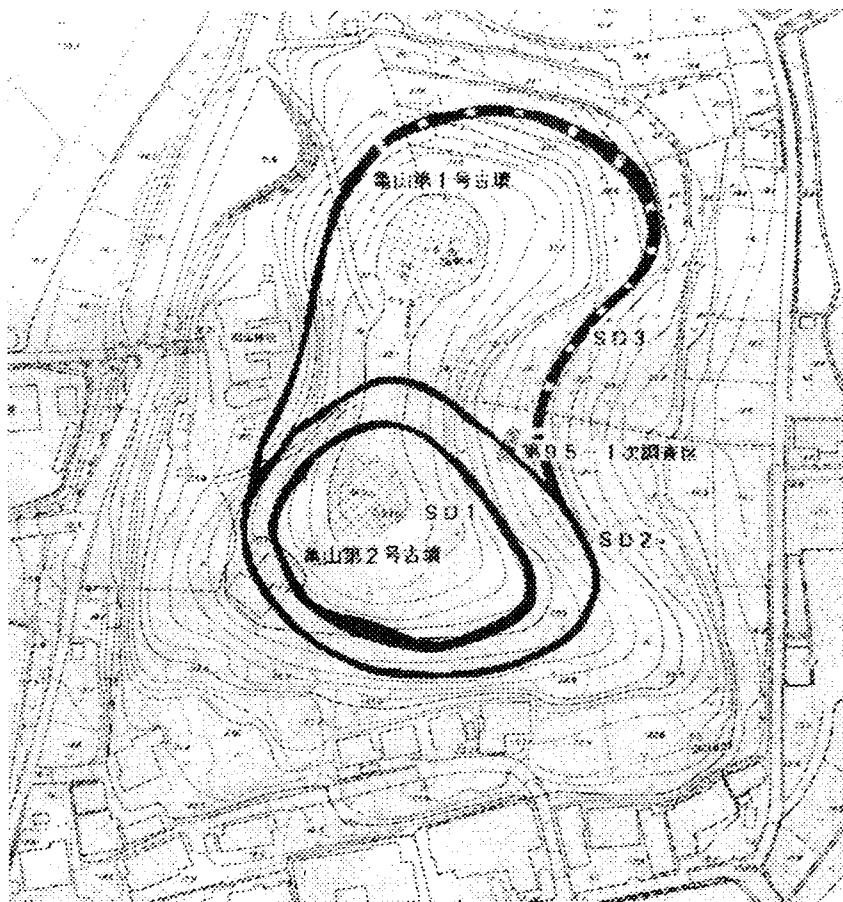


(39) 鉢破片



猫山古墳出土埴輪片

猫山古墳は径30mの円墳である



亀山遺跡図面

編集・発行 備陽史探訪の会

〒720-0824 福山市多治米町5-19-8

TEL (084) 953-6215



第11図 道上地区遺跡分布図

- a 龜山遺跡 b 護国寺遺跡 c 鍋屋古墳 d 門前地点 e 中谷遺跡 f 浄光寺地点
 g 中谷廃寺 h 渡瀬遺跡 i 大附古墳 j 宮ヶ峠遺跡 k 岩崎遺跡
 1 段坪古墳 2 猫山古墳 3 的場遺跡 4 大坊古墳 5 龜山第1号古墳
 (丘陵上●は古墳、○は古墳の可能性のあるものを示す)